

中国单身女性調査 by Wu Shuping (吳淑平)
copyright © 2010 by Wu Shuping

This Japanese translated edition is published by arrangement with
Wu Shuping c/o Beijing GW Culture Communications Co., Ltd., Beijing
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

自序

六年前、「独身女性調査」という本を出版すると、比較的注目され、数種類の全国紙で相次いで取り上げられもし、ネット上のアクセス数も非常に多かった。けれども私自身にはどうにも意外でしかたなかった。それと言うのも、私の他の著作の方がこれよりかもしれませんが思っていたからだった。

そのため、外文出版社編集者の劉女史から、この本の英訳版を出版したい旨の話があった時には、私の他の著作を出版したらどうかと勧めたほどだった。でも内容や売れ行き動向などからだろうが、彼女はあくまでもこの本の出版にこだわった。

私には時として、純文学の方が本書のようなルポルタージュの類よりずっと価値があると思う傾向がある。

以前、ある新聞の「告白を読む」欄を担当していたため、そうした類の本が世に出るのは当然ではあったが、私の純文学への思い入れが強かったからだろうが、こうした仕事が時間とエネルギーのまったくの無駄遣いのように思われて仕方なかった。そのため二〇〇八年末に『親身になって』を出版した時には、序文で、今後は告白物には手を染めないとまで記した。それにも関わらず、なんの因果か再度、本書を書くことになってしまった。しかし、おそらくこの先はもう決してこのような内容の

ものを書くことはないだろう。

六年後の現在、原稿の見直し作業を進めてみると、汗顔の至りである。私の足腰が定まっておらず、その結果、調査が綿密、周到とは思われない何人かの人物についての文章を思い切って削除することにした。そのため分量が半分ほどになってしまい、あらためて未発表の新しい調査内容を加えることにした。調査範囲は北京、上海、広州、深圳といった大都市から成都、厦門、杭州、岳陽など中都市にまで及んでいる。しかも現代人は同じ都市に住み着こうとしない人が増えてきていて、どこの都市の人という枠組みで括ることが難しいケースにもよくぶつかったことから、本書を『中国独身女性調査』とした。

個人のプライバシーに関わる本音や告白に切り込んで、まとめた文章を読んだ多くの人は必ずと言っていいほど、次のような質問をする。「これは事実なのか」と。その答えはもちろん「その通り」である。ただ断っておかなければならないことがある。それは当事者の口頭での物言いと、文章にした表現とでは完全には一致していないということである。口語表現をそのまま文章にはできないからだが、しかしその内容は細部に至るまで、すべて語られた事実そのものである。

その他にも説明を要することがある。文章中に記された対象者の年齢はすべてインタビュー当時であり、現在の年齢はそれぞれ一歳から六歳、加えなければならぬ。またあらためて連絡の取れたインタビュー対象者は、現在もすべて独身であり、厳密に言えば、すべて未婚のままであった。どうやら「女性余り」の時代、結婚はなかなか難しい問題になっているようである。

以前、私を「心情専門家」と呼ぶメディアが少なくなかったが、それはあまり正しいとは言えない

だろう。なぜなら私は専門家ではなく、ごく普通のメディア人であり、作家であり、心情分析でも強いて言えば、研究者に過ぎない。仕事柄、多少は研究して、少々自分なりの捉え方を持っているに過ぎないだけである。

私が心理分析医でないことは、大いに強調しておかなければならないだろう。これまで心理、心情に関する作品を発表したり出版するたびに、読者から心の悩みについての質問が数多く寄せられた。私はそれらの手紙には誠意をもってすべて返事を書いてきた。ただ私は占い師ではないので、読者の簡単な記述内容だけで十全な処方箋を書くことはできなかった。かりにそのようなことをすれば、無責任な行為であろうし、自分が善導師にでもなったような過信の結果にほかならないだろう。

対象者へのインタビュ―時、私は忠実な記録者に徹し、訴えかけてくる者の隠された事実を漏れなく記録することこそ私のやるべき仕事だった。彼女たちの話から屈折して見える現代中国社会の心情問題、心理問題、家庭問題、そして社会問題については見識豊かな方々、あるいは後世の人びとの研究にゆだねるしかない。

これをもって序としたい。

呉淑平

独りじゃダメなの——中国女性26人の言い分
目次

自序

あのころに戻りたい

私が北^{こく}まで来た理由

私は金魚

一文字が不倫の始まり

北京のカリスマエステティシャン

女は子どもを産む機械だなんて！

母も私も結局 “女”

結婚したい！

留学はしたけれど

羊はオオカミが好き

シングルマザー

僧侶と恋に落ちて

おとぎ話とは違ってた

3

13

26

37

47

52

57

68

75

81

87

97

118

141

欲張る女

二股の果て

この気持ち、どうすればいいの？

街は輝いているけれど

求む！ 休日の恋人

金持ちなんて最低！

男好きの女

結婚はしたけれど

心はひとつ

天国の恋人

第三者って誰？

はつきりさせてよ

ゲームなのか夢なのか

本書の翻訳について

コラム

- ① 近年の離婚事情とその後 43
- ② 中国の出稼ぎ事情 63
- ③ 中国の住宅事情 115
- ④ 中国における通信手段の変遷について 136
- ⑤ 中国人の収入について 176
- ⑥ 近年の結婚事情 218
- ⑦ 中国の学校事情・大学生の就職事情 265

独りじゃダメなの——中国女性26人の言い分

あのころに戻りたい

取材場所…北京市朝陽区のレストラン

取材相手…王萌萌
ワンモモモ

年 齢…二十八歳

略 歴…大卒、教育関係会社経営、章子怡に酷似。

一

彼とはブログで知り合い、QQ「チャット用のソフトウェア―訳者注」で愛しあうようになり、初めて会って燃え上がり、終生の愛を誓い合った。「永遠（とわ）の幸せ約束して、あなたのために書いた歌、彼もそつと涙を浮かべ、私もあなたとの約束忘れない、今ではもつと愛しているの」というあの『約束』の歌詞とそっくりそのまま。

ブログが流行り出した頃だった。彼も始めたばかりで、自分の気持ちや思いを書き込んでいた。当時、私は辛い愛を終わらせたばかりで、もう愛を育てることなんてできないと思っていて、男という

ものに壁をつくって、私に言い寄ってくる男たちに心が動かされることなどなかった。彼は彼で、行き違いの愛を終わらせたばかりで、結婚することもないだろうと思っていたらしい。

ところが以心伝心、それとも前世からの因縁なのか、私は彼のブログが気に入り、毎日必ずチェックして、じっくり読むようになった。でも最初の頃は読むだけで、書き込みなどしなかった。

やがて彼が真面目で、善良で、親しいで、責任感があり、頭が良いことに気がつき、どれも私が求めているものばかりだった。でもそんな私の思いは心の奥に抑え込んでしまっていた。

一年半が過ぎたある日、彼の文章に感動し、いてもたってもいらなくなってQQの番号を書き込んだ。それまでの彼は十人以上のQQを無視していたけれど、私だけは何となく感じるものがあったらしく、QQに加えたらしい。

パソコンを開けたとき、私を加えたことに気づいて、どうしても気持ちを抑えられずに「本当なの？」と訊いたら「そうだよ」と返ってきた。

パソコンでお互いの画像を見ながら、二人は前世からの知り合いだったかのように、とてもしっくりいっていて、たぶんこれが一目惚れっていうものだったのかもしれない。チャットをしていて、これほど楽しく、気持ちを通じ合ったことなどなかった。

互いにQQに登録し、頭から離れない存在になっていった。私は遅寝遅起き、彼は早寝早起き、でも彼の出勤前にチャットしたくて朝からパソコンを開けて待った。彼も、帰宅するなりパソコンを開けて私を待った。互いに仕事を片付けると急いで帰宅し、QQで相手の画像を見つめ合うようになっていった。

八月十八日の日記にこう書いた。まだ会ったことのない人にこんなに恋いこがれてしまっていて、片時も彼のが忘れられないのは、神様が引き会わせてくれたのかもしれない。彼こそ私の未来の夫、だって正直で、善良で、向上心があつて、私は彼の心を読み取れるから、二人が一緒になれば、私はきつと彼を幸福にしてあげられる……彼以外の人はもう考えられない。

彼の方もずっと想い続けていたらしい。愛の経験を積んできた大人だけに、会ったこともない人にならなくてこんな夢中になるのか、本当に神様がいて、神様の思し召しなのだろうか、と。

私はQQに二度、携帯電話の番号を送った。彼は口では番号を覚えたと言っていたけれど、実は覚えていなかった。必ず彼から連絡が入るはずと思っていたものだから、知らない番号から電話がかかってくるたびにドキドキしたけれど、いつも失望させられ、メールも入らなかった。

あとで彼に聞いたら、「幻影」という言葉を耳にするたびに怖くなり、衝動的になるまい、私を傷つけない、自分で自分を抑えなければ、と考えて直接連絡できる手段は使わないと決めて、私の番号を覚えなかった。互いに失望することなく、美しい思い出として残せたほうがいいと思ったのだそうだ。

でも、あふれる気持ちは次第にどうしようもなくなっていく。まるで洪水が堤防を決壊させるように。彼は暇さえあればQQで私を待ち、私に返事を書いていくという。

あるとき兄嫁に話したら、それは本当の愛だから、広州へ会いに行けばいいと言われた。彼にそのことを伝えると、はつきりとは言わなかったけれど、ためらっていたみたいだった。

それから間もなく、兄といっしょに実家へ行く用事ができ、日程も決まった出発六時間前になって、

このことを彼に伝えた。あなたが望むならすぐ広州に飛行機で行き、四時間だけだけれど時間が取れると。でも彼は、あまりにも慌ただしすぎる、二人の愛がずっと続くなら慌てることはないと言ってきた。

そのときは会えなくてちよつぷりがっかりしたけれど、彼の言うとおり、二人の愛がずっと続くなから、急ぐこともないと自分を納得させた。

私の実家は江西省上饒市（江西省上饒市）の小さな町で、家にパソコンはなく、町にはネットカフェもなかった。そのためいつもの連絡手段が使えず、その数日間というものの電話やメールを心待ちにしていたけれど、彼は自制していたらしい。私はしょっちゅう彼に抱かれて眠っている夢を見ていた。

故郷では友達や親戚と会って数日間、過ごしたけれど、彼のこと忘れられるのは一時でしかなかった。一週間近くなると、とうとう我慢できなくなり、親戚の人たちと大きな町へ食事に出かけたとき、友達の家に行くと言っていると嘘をついて、ホテルに泊まった。ネットカフェに行くため、彼は毎日、QQに私へのメッセージを残してくれていて、とても興奮したし、嬉しかった。彼のメッセージを見るためだけにホテル代三百元を使ってしまったけれど。

北京に戻るや、真っ先にパソコンを開いた。夢中でキーを打つ二人の会話は支離滅裂だったと思う。しばしの「別れ」が感情を高ぶらせてしまっていたから。

それまで私は一人の人をそこまで思ったことがなかった。何をしても彼のことが頭から離れず、彼から言われれば、すぐに何でもしようと思った。他の人から頼まれても無視しただろうけれど。彼も私を信じて何でも話してくれた。私たちは一緒に事業を起こす計画を立てた。その頃にはすでに普

通の友達や恋人ではなく、血のつながった肉親のような奇妙な感覚になっていた。

ウエブのサイトで姓名判断を試みたら、不思議なことに、前世では家族だったし、現世では夫婦になる運命があると出た。生年月日占いでも二人の相性はぴったりで、私は文句なしにそれを信じた。彼へのこうした感覚を現実の知識だけで説明するのは難しかったから。

二

ひと月ほど経ったある日、仕事中に携帯電話の電池が切れてしまった。仕事を終えて帰宅し、いつも通りパソコンを開けた。どんなに忙しくても八時半には家にいるようにしていた。パソコンを立ち上げながら携帯電話の充電もした。そしてQQに入るや、今夜九時に北京空港に着くから迎えに来てほしいというメッセージが目飛び込んできた。携帯にも入れているはずと想って開いて見るや、十八通も入っていた。一通だけ知らない番号があり、開けてみると、それも彼からで、内容はQQと同じだった。私は舞い上がりながら慌てて着替えをして、車を飛ばした。家から首都空港まで車で三十分ほどなので、スムーズに走れば彼の到着と同じくらいに着けると思い、車を思いっきり飛ばした。空港に着いても彼からの電話がなく、私は十二番ゲートで待っているとメールを出した。彼からは荷物のピックアップ待ちとの返信があった。

それから数分後、私がまたメールを出すと、今行くとの返事。そしてついに十二番ゲートから彼が姿を現した。写真で見ると同じだった。ずっと前からの恋人のようで、初対面だなんて思えなかつ